

World Navi

ワールドナビ Vol. 13
2014 SUMMER

Navi
対談

「世界の国々がまた日本に目を向けはじめた」

独立行政法人日本貿易振興機構 理事長

公益社団法人 国際経済交流協会 代表理事

石毛 博行 × 米田 建三

地域産業支援事業 四万十の銘酒と創作オツマミを味わう会

海外進出支援事業 インド洋の真珠 知られざるスリランカの魅力

人材育成事業 「リーダーに求められるものは……」 君塚 栄治

企業紹介 『太平グループ』(後藤悟志社長)

事業のウイングを広げ続ける“謎”の企業

いま一番訴えたいこと 衆議院議員 松浪 健太 衆議院議員 柴山 昌彦 参議院議員 行田 邦子



Navi 対談

聞き手

公益社団法人 国際経済交流協会

代表理事 米田 建三

独立行政法人日本貿易振興機構

理事長

石毛 博行

「世界の国々がまた日本に目を向けはじめた」

■JETROの歴史は 日本経済の戦後史

米田 私どもの社団法人は、日本の中小企業の海外進出時のサポートを目的の一つに設立されました。その意味では石毛理事長のJETROともご縁が深く、たとえば貴機構の吉村理事には当協会が事務局を務める日本ハンガリー経済交流促進協議会の顧問をお引き受けいただいております。

そしてJETROといえば、現安倍政権の経済政策の大きな柱の一つである成長戦略の要を担う存在であるということが言えると思います。ところがその一方で、世

間一般ではJETROと云っても「名前は知っているが、具体的な活動内容は知らない」という人が大勢なのではないか。そこでまず、JETROとは何ぞや——と、そこから伺わせていただきます。

石毛 JETROは1958年、特殊法人日本貿易振興会という名称で発足しました。その前身は1951年大阪に生まれた財団法人海外市場調査会です。戦後まな

く、まさに日本はこれから輸出に向けて頑張っていかなくちやいけないという時代でした。この財団法人と、国際見本市協議会、日本貿易斡旋協議会が統合して財団法人海外貿易振興会が生まれ、やがて特殊法人日本貿易振興会、そして現在の独立行政法人日本貿易振興機構へと繋がってゆくわけです。

そもそも、JETROのEはExport（輸出）のE。70年代までは輸出促進が我々の主たる業務でしたが、80年代に日本の大幅な輸出超過、つまり貿易黒字が海外から批判されて、これからは輸入の拡大にも取り組もうということになりました。それまでのよ



情報提供のためにJETROが作成したベトナム・ホーチミン市街地の地図



うな原材料の輸入だけでなく、製品の輸入にも力を入れるようになったのです。当時の中曽根康弘総理自ら輸入物のネクタイを締めてテレビに登場するといった国民運動が展開されました。ですから、現在、JETROのEはExternal(外との関係)のEです。

それから日本企業の海外進出。80年代、海外に出てゆく日本企業

うどその10年前くらいからでした。当時は小泉純一郎内閣の時代で、もつと対日投資を増やそうじゃないかという計画を立てました。実際、まあまあ増えつつあったのですが、2008年のリーマン・ショックで横ばいしないしは微減に転じてしまったというのが実態です。それを今度は、アベノミクスで倍にしようという目標を立



は大企業が中心でしたが、90年代後半くらいから中堅どころの企業もかなり海外に目を向けるようになりました。とりわけ2000年代後半あたりから中小企業の海外展開が目立つようになり、私たちのところへ情報——それも産業界報、制度情報、企業情報といった具体的な情報を求めて来られる方が増えました。現在JETROでは、国内に東京・大阪の本部に加え40カ所の貿易情報センター、海外では56カ国74の現地事務所を設けて個別の相談にあたっています。

米田 まさに戦後の日本経済の発展を伺っているようですが、最近海外からの対日投資の拡大にも注力されていると聞かれています。6月には、貿易および投資を促進すべく米マサチューセッツ州政府とのあいだで覚書を締結されました。米州政府との覚書はこれが初めてですか？

石毛 そうです。さきほど言った輸入促進の時代には各州政府と一緒に日本の市場に輸出できるものはないだろうかと、そういう掘り起こしをかなり熱心にやった実績はありますが、覚書には至りませんでした。

米田 ひと口に対日投資を促すと

ているわけですが、規模は小さいけれども日本市場に魅力を感じている外国企業の進出に対し、一件一件丁寧にサポートさせていただくのが私たちの重要な仕事であると位置づけております。

■日本の農産物と加工品を世界へ

米田 WIN-WINと言えば、当協会の会員で欧州からシャンパンを輸入している会社があるのですが、その取引先のフランス・シャンパーニュのメーカーがレストランその他200件ほどの納入先をフランス国内に持っているんです。そこがぜひ日本酒を扱いたいというので日本酒メーカーを紹介したところ、先方も興味を持って契約が成立しそうなんです。微力ながら我が方もそんな取り組みをしております。

石毛 ほう……それは非常に興味深い。じつは、今代表がおっしゃられた日本酒の分野というのは、日本の農産物の輸出振興に繋がるといって2年ほど前から我々も力を入れている分野の一つなのです。現在、日本酒の輸出規模が年間100億円程に対し、フランスワインは1兆円前後ですか

言っても、相手の産業の特性をよく見極める必要がありますよね。たとえばフランスでは日本の高齢化を見越してヨーグルトなど乳製品の対日輸出に熱心と聞いていますが、マサチューセッツ州の産業の特徴は何でしょうか？

石毛 マサチューセッツ州は、アメリカの中でも医療機器やバイオといった分野のハイテク産業が集中しているところなんです。従って狙いは二つあって、マサチューセッツの側からするとそういう分野で競争力のある日本企業に来て欲しい、逆に日本側からするとそういうマサチューセッツの企業に日本の市場に投資をして欲しい。そして協力し合って、お互いにWIN-WINの関係をつ



JETROが作成している資料の一部

ら、日本酒輸出の可能性は非常に大きいんじゃないかと期待しています。それで海外からバイヤーを呼んで年間10回前後の試飲会を開くなどのPRをしたりしますが、今後は裾野を広げてよりいっそうの周知活動が必要であると痛感しているところです。

米田 私たちもこの6月、地域産業支援事業ということで高知の日本酒メーカーと震災から立ち上がった東北の水産加工品会社の試飲会を開催しました。また、欧州や東南アジアで日本酒の試飲会を開こうという計画もあるのですが、その際、一番の課題はしっかりとバイヤーを確実に呼び込み、具体的な商談を成立させることです。この点に関して、JETROの方では長年の豊富な蓄積とノウハウがありと存じていますか？

石毛 信頼のできる海外のバイヤーを日本の企業に紹介するというのが私たちの重要な仕事の一つです。ですから、そういうバイヤーのリストをデータとして持っています。そのリストを使って、たとえば各国の農産物や食品のバイヤーを北海道に集めて商談会を開く、というようなことをやっています。あるいは、震災後の福島に呼

くつていきましよう、ということなんです。これは去年の12月にマサチューセッツ州のパトリック知事が来日された際、私たちの仕事を説明したところ、先方が大変興味を持ってくださったというのがきっかけでした。

米田 このマサチューセッツ州と、先程のフランスと、世界の国々がまた日本に目を向けはじめたと言えますか？

石毛 それはそうです。アベノミクスで再び世界の注目を集めるようになった日本経済ですが、率直に言って、この10年位は海外投資家のリーダーズクリンから消えていきました。JETROが対日投資の促進事業を始めたのは、ちょ



んでみたりとか、日本酒の分野でしたら「酒サムライ」と称する日本酒の若手蔵元組織がありますので、そういうところへバイヤーを案内してみたりとか……。

米田 それは素晴らしい。日本の農家や蔵元が売り先を見つけに外国へ出てゆくのはなかなかできることじゃありません。気持ちがあっても最初の一步が踏み出せないというところが多い。しかし、こちらが出来るのではなく、向こうから来てくれるというならハードルはグッと下がるでしょうね。

石毛 私たちの仕事はまさにそこなんです。「つなぐ」ということ

地域産業支援事業



『四万十絆』で乾杯



景気よく鏡割り

四万十の銘酒と創作オツマミを味わう会
振袖ドレスが華を添えて……

地域産業支援事業は、満員御礼の大盛況でした。

「厳選された銘酒」と美味極まる「創作おつまみ」の試飲食会。即売会が6月4日、東京・永田町



輸出促進とともに
投資呼びかけ

米田 米田 ここ数年、私は外務省をはじめ政府の関係者に会うといつも苦言を呈するのですが、世界で日本の存在感がどんどん

国内外の生産者やバイヤー、それから政策を実行する国や自治体の政府や機関を私たちが知っているということ、目的に応じた展示会や商談会を通じて最適なビジネスパートナーを探すお手伝いをしています。

これは私たちが海外の投資家向けに作成したパンフレットですが、タイトルがまさに「Talk to JETRO First」。「まずJETROに相談してください」です。同時にプロモーションビデオも作っていただきました。私たちのところへ来てくだされば様々な情報を提供できますよ、ということですが、逆もまた然りです。海外に出てゆく日本の投資家の皆様にとっても「Talk to JETRO First」と申し上げたい。

低下しています。この前は東欧をまわってきたのですが、プラハの空港で外国語の表示は英語とロシア語と韓国語で、日本語がない。昔日本はあれだけチェコを応援し、今も多くの日本企業が進出しているのに、ですよ。バンコクの空港ですら英語と中国語だけだし。もっと日本の存在感をアピールするために、相手国への申し入れ等、努力すべきではないか。

石毛 それは私たちJETROにも責任の一端がある。日本の影響力が低下していることは、すなわち日本の経済力が低下しているということ。日本の経済が大きいということはそのまま日本の魅力が大きいということであり、すべての分野で有形無形に良い影響を及ぼすことになり。だから現在、アベノミクスで日本経済全体が力強く復活しつつあるということは、個々のビジネスにとっても大変な追い風になるのです。

米田 かつて通産省が日本経済の海外への拡大の先頭に立ち、花形官庁だった時代がありました。後になってそれが何だか悪いことのように言われ出して、バタバタしているうちにいつの間にか後発国に追いつかれてしまった。最近になってようやくかつての日本が

復活しつつあるのかな、という風に感じておりますが……。ところで、外務省も企業をサポート実務に取り組み始めましたね。

石毛 外務省との連携で言えば、力を入れているものが二つありまして、対内直接投資と農林水産物・食品の輸出促進の分野です。対内直接投資の促進に関しては、常々以下の三点を申し上げてきました。一つは投資環境を良くすること。これは法人税率の引き下げや規制緩和などですね。二つ目は情報発信をもっと高いレベルで行うこと。いま総理が世界中をまわって投資を呼びかけていただいているのは極めて重要なことです。そして三つ目に、個別の具体的な呼びかけ。投資はかけ声だけでは動きませんから。

米田 対日規制緩和についてはいかがですか？

石毛 欧州へは口蹄疫問題で輸入制限のあった牛肉が輸出できるようになりました。いまは中韓が一番厳しく規制しています。震災後、特に中韓と台湾が放射性物質を非常に気にしていました。そこでまずタイのバイヤーに福島へ来てもらって、検査体制や生産過程を直接見てもらいました。その結果信用されて、輸出できるようになりました。

の星陵会館にて当協会の主催で開催されました。冒頭には国会から逢沢一郎、河村建夫、佐藤章、石関貴志、東郷哲也の各代議士が祝辞を述べ、またオリンピックメダリストの森末慎二氏とアジア大会メダリストの田中理恵さんも特別参加し、会を盛り上げてくれました。

銘酒は、清流として知られる高知・四万十川の流域で穫れる米と豊かな伏流水を用い、醸造技術の粋を結集して醸した藤娘酒造(株)の吟醸酒と梅酒。そして、その蔵元と東京西部地区で広く飲食店を展開する(株)プライズが提供する特別ブランド『四万十絆』。

合わせるおつまみは青森・八戸の(株)ヤマヨの『特製しめ鯖』や『イカ製品』などの海産物。ヤマヨはいち早くHACCP認証を取得し、北米市場をはじめ海外展開にも挑戦しています。また(株)リベラ特製の『鎌倉野菜カレー』も好評

を博しました。

加えて着物の現代活用やJICA（国際協力機構）との協力事業にも積極的に取り組んでいる(株)中駒織物が、振袖ドレスの展示や風呂敷活用の実演などを披露。150名を超える参加者を楽しませてくれました。



メダリストらが特別参加



藤娘酒造(株)の人気ブランド



満員の試飲食会会場



独立行政法人日本貿易振興機構
理事長 石毛 博行
イシゲ ヒロキ
1950年生まれ。1974年東京大学経済学部卒業後、通産省に入省。通商政策局国際経済部通商関税課長、通商協定管理課長、生活産業局原料紡績課長、産業政策局総務課長、大臣官房秘書課長等を歴任。2001年の省庁改編後も経産大臣官房秘書課長、大臣官房総括審議官、資源エネルギー庁次長、製造産業局長、中小企業庁長官、通商政策局長、経済産業省審議官などの要職を務めた後、2008年経済産業省審議官を最後に退官。経産省顧問(備後保ジャパン顧問を経て、2009年10月より現職。



公益社団法人国際経済交流協会
代表理事 米田 建三
ヨネタケケンゾウ
1947年長野県生まれ。県立松本深志高等学校卒業。横浜市立大学商学部経済学科卒業後、出版社勤務。1987年、横浜市議員に当選し、1993年に衆議院議員に初当選。以降、3期連続当選。北海道開発総括政務次官、防衛庁政務官などを歴任し、小泉内閣では、内閣府副大臣を務めた。帝京平成大学教授を歴任後、2010年5月に社団法人国際経済交流協会代表理事に就任。TV・雑誌等メディアでも活躍している。

なり、一昨年には王室に献上されるまでになったのです。

米田 最後に民間団体との連携についてお伺いします。

石毛 JETROは非常勤を入れても2000人。それに対して日本には400万の中小企業が存在します。そのうち何割かが海外展開を考えたとしても、JETROの人員は余りに足りない。今後は民間団体と連携して、中小企業の海外進出を支援してゆくことが不可欠と考えております。



インド洋の真珠

知られざるスリランカの魅力

インド亜大陸の南東に位置し、その地形から「インド洋の真珠」とも呼ばれるスリランカ。

1948年にイギリスから自治領の形でセイロンとして独立し、1972年にはスリランカ共和国に改称して英連邦内の共和国となったのち、1978年、スリランカ民主社会主義共和国と国名を変えて現在に至っていますが、イギリス植民地時代のセイロンの呼び名の方がよく知られているかもしれません。

人口およそ2000万人、面積は北海道の80%ほどのこの国が、

いま注目を集めはじめています。

第一には、観光の国としての注目。スリランカは1983年以降、20年以上にもわたる内戦状況にありましたが、2009年の内戦終結以来、観光客は年々増えており、10年には65万人、11年には85万人、さらに12年には100万人を突破しました。

8件の世界遺産を誇るなど、歴史的遺産に富み、豊かな自然環境と共に国の魅力を高めているからだとみられます。

次に、経済的側面からの注目。スリランカの主要産業は農業と軽

工業ながら、高い経済成長を遂げてきています。2012年統計によると日本への輸出は331億円。主な製品は紅茶、衣類、魚介、ゴム製品などですが、ジェネリクス医薬品産業が有望との分析もあります。一方、日本からの輸出は225億円で自動車や一般機械が中心です。

さらに、貿易拠点としても注目されています。スリランカを拠点にすればその地理的な優位を生かして、インド、ASEAN、中国、中東、トルコ、アフリカ、欧州までも視野に入れた市場展開が可能とみられるからです。

空港・港湾インフラも充実しています。しかも、内戦後は治安も安定し、住環境は良好。教育程度も高く、綺麗な英語を話す人が多

いと評判です。仏教徒が70%で、穏やかで親的な国民性とも言われています。また、労働力については高い評価を得ています。

こうした「魅力」ゆえのことか、すでに日系企業は60数社が進出しています。また、将来的には、内戦で戦場になった北部を中心にインフラをはじめ大きなビジネスチャンスが予想されますし、観光分野においては日本の「おもてなし」産業の商機も見込めそうです。

ところで、日本とスリランカの間には、忘れることのできないこんな歴史の一コマがあります。

1951年、日本はサンフランシスコ講和条約締結を経て国際社会へ復帰を果たしましたが、これに先立つ講和会議において、セイロン代表のジュニウス・リチャード・ジャヤワルダナ蔵相は「憎悪は憎悪によって止むことはなく、憎悪を捨てることによって止む」という仏陀の言葉を引用し、対日賠償請求を放棄する演説を行ったのです。

ともあれ、魅力あふれる親日的なスリランカ。当協会は関係諸機関の協力を得て進出のお手伝いをいたしますので、興味をもたれましたらご一報ください。

本誌編集部



上/スリランカの国花、ブルーロータス
中/スリランカ最大の都市であるコロンボの市街地
下/香り高きセイロンティーの産地・ヌワラエリヤでの茶摘みの情景
(C)スリランカ政府観光局



東日本大震災において活動する自衛隊員。陸上自衛隊のホームページより



多くの写真を活用した君塚氏の講演



講演を熱心に聞き入る上級管理職

「リーダーに

求められるものは……」

— 10万人の指揮官としての経験から —

当協会は田辺三菱製薬株式会社の上級管理職を対象とした「部長研修」にて、『リーダーシップ』をテーマに特別講演を担当しました。君塚栄治氏を講演者に迎え、『管理者に必要なビジョニングとストーリーテリング』と題して開催。同氏は東日本大震災において10万人規模の統合部隊指揮官を務めたのち、陸上自衛隊幕僚長に就任したトップリーダーの一人です。今回はその内容をご紹介します。

*

特別講演は、さる6月17日に開催されました。

君塚氏が自己紹介ののち、東日本大震災における指揮官としての経験をベースに、まずはリーダーシップが問われる重要局面をピックアップ。そのうえで、それぞれについて解説していききました。以下がその概要です。

(1) 着任当初

支援が災害派遣の任務としてできるのか。一方、どうせやるなら被災地の復興につながるようにしたいが、どうしたらそれができるか。放射能の除染、ハエや蚊の駆除、仮設住宅の建設用地の整備……どこまでやれば終わりととなるのか。それぞれの場面における指揮・統率、すなわちリーダーシップのありようを明かした。

(5) 撤収の局面

それまでの評価を維持しながら、いかにスムーズに撤収するか。活動の主役である隊員にいかにか敬意と感謝を表すか。最終局面でのリーダーシップについて解説。

(6) 外部への対応

いかに政府や自治体、マスコミ等に対し、説明責任を果たすかといった点について言及。

(7) 全体論

いかに部下・部隊および自分自身の力を出し切るか。現場の最新情報をいかに収集するか。状況の変化に応じ、いかに方針転換を行い、それを徹底させるかなどといった点について詳述。

このような局面ごとの実例と解説を踏まえ、リーダーシップを発揮するために不可欠な「ビジョニング(どのようなビジョンを持

早急に現状分析を行い、いかに指揮・統率の方針を掲げたかを説明。

(2) 人命救助・行方不明者の捜索
人命救助の局面では、タイムリミットとされる72時間の部隊運用をいかに行ったのか、また行方不明者の捜索においては、どこを区切りとするのかといった判断を、隊員のメンタリテイにも考慮しつつ、どのようにして行ったのかを詳述。

(3) 生活支援の局面

被災地のニーズと支援する側のリソースをいかにマッチングするか。また、支援活動が終わりの見えない様相を呈する中、いかに隊員の緊張感を維持するか。今後のニーズをどのように予測し、将来の部隊運用に織り込むか。そういった難局にどのように対したかを解説。

(4) 応急復旧支援の局面

瓦礫撤去を応急復旧支援と位置付けていいものか。どの程度までつべきか」とストーリーテリング(どのようにして部下に説明し、納得させ、動かすか)の秘訣について、実例を交えて詳しく語ったうえで、君塚氏はこう締めくくりました。

「限られた資源と限定された時間の中で、最適解を見出すことがリーダーに求められるのが世の常。平素からの準備を怠らず、事に際しては、すばやく覚悟を決め、また部下にはすばやく覚悟を決めさせるべく努めていただきたい」

講師 PROFILE



君塚 栄治 キミヅカ エイジ

1952年生まれ。76年防衛大学校卒業。98年第10特科連隊長。以後、那覇駐屯地指令兼第1混成団長、陸上幕僚幹部人事部長、伊丹駐屯地指令兼中部方面總監部幕僚長を歴任。07年陸将に昇格、第8師団長。08年防衛大学校幹事(副校長)。09年第34代東北方面總監。11年3月14日～7月1日、東日本大震災統合任務部隊(JTF-TH)指揮官。第33代陸上幕僚長。13年退官。現在、株式会社小松製作所顧問。静岡県補佐官(危機管理担当)。

海外見聞録
米田代表の見たまま・聞いたまま

映画『その男ゾルバ』の島・クレタ
エーゲ海の最涯に官能と激情の風が吹く

さる年の夏、うだるような暑さの中、ギリシャ・クレタ島を訪ねた。地中海の東、ギリシャとトルコに横たわるエーゲ海の南端に、その島はある。水平線の彼方はアフリカ大陸だ。

青銅器文化・エーゲ文明の一環であるクレタ文化（BC1880～1300）繁栄の地である。最高神ゼウスが生まれたとされる島でもある。半人半牛の怪物ミノ



クレタ島の港に停泊する釣り船

タウロスが閉じ込められた迷宮伝説で有名なクノッソス宮殿等々、神話の世界が目の前にある。

他の地中海の島々の例にもれず、ギリシャ、ローマ、アラブ、ベネチア、オスマントルコと目めまぐるしく支配者が変わり、幾多の戦乱を経て1913年にギリシャに帰属。常に征服者と戦ってきた民衆の歴史がある。情熱的で、誇りを守るため、時には、支配者に対する絶望的な反逆も辞さず、自由への強い憧憬を抱き続けてきたのがクレタ人気質だ。

実は、クレタへの旅の第一の理由は、古代文明探訪ではない。クレタ生まれの作家、ニコス・カザンザキス（1883―1957）の小説『その男ゾルバ』（1964年、アンソニー・クイン主演で映画化）の息吹に触れるためだ。カザンザキスは仏教にも興味を持ち、日本を訪れたこともある。キリスト教世界の枠を超える精神の自由を生涯追求した人物である。作家は小説の序文にこう記した。「私の生涯でどんな人が私の

魂に深い痕跡を残したか：ホメロス、ベルグソン、ニーチェそしてゾルバである」前三者は世界文学・哲学史上著名な人物である。しかし、ゾルバは作家が出会った実在の無名の労働者だ。作家は1917年から2年間、アレクシス・ゾルバというバルカンを放浪する男と組んで鉱山の仕事をすることがある。事業としては失敗したが、小説の素材になった。

序文は「私の大好きな労働者ゾルバ」について、こう続ける。「ゾルバから生を愛し、死を恐れないことを教わった」「あの大食漢、大酒飲み、女たらし、放浪癖、仕事の鬼、寛大な魂、頑強な体、最も自由な叫び」。

物語は、アテネ近郊、ピレウスの港から始まる――

雨に濡れた港の酒場。荒くれ船乗りどものなかで、一人の青年紳士がクレタ行き船を待っている。周りは酔っ払いばかりだが、彼だけはダンテの詩集を読みながらお茶を飲んでいる。ギリシャ人だが、英国あたりで高等教育を受けたインテリ作家だ。父の遺産であるクレタ島の亜炭坑を再開するために島へ渡るので、事業のためというよりも、『本の虫』から脱

界のどこにも寄る辺のない究極の寂しいエトランゼ。昔、地中海世界の争乱で活躍した、英仏露伊四国の提督に愛されたことが自慢の想い出だ。

ブヨブヨに太って、擦り切れた昔の晴れ着をまとい、年老いた猫のような彼女だが、その「現実の陰に潜む女の可愛さ哀しさというものに価値を置く、というよりも女性を口説くのは男の義務だと確信するゾルバは、ついに彼女と理無しの仲になり、結婚の約束をする羽目になる。彼女の死で、その約束を果たさなくて済んだが、ゾルバは『本の虫』の『私』に、村の未亡人（演ずるはギリシャの美貌女優・イレネ・パパス）に、夜這いをけしかける。「彼女は旦那に気がある。旦那も彼女が好きだ。だったら行け！」という調子だ。『私』はゾルバの教えを決心する。その後、女は、彼女に恋焦がれて受け入れられず自殺した若者の一族に殺された（土着の風習!?）。欧州とはいえ、地中海の果てクレタには、異境の風が吹く。



僧侶や村人を迎えて、亜炭坑開所式を迎える。しかし、石炭運搬



クレタの首府イラクリオンに立つ筆者

用のケーブルが大崩壊。坊主も村人も散り散りになって逃げ去った。二人だけになって、ゾルバは聞く。「旦那、ケーブルが吹き出した火花を見ましたか？」二人は大笑いする。笑い続ける『私』を、「それでいい」と言わんばかりにゾルバは抱きしめた。そうだが、『私』はすべての財産を失った。しかし、それがどうしたというのだ!? 別れの日の夜、浜辺で狂ったように踊る二人。映画はここまで。だが原作はこれからがいい。

惜別の情がこみあげ、「お前とここに残る」という『私』に、ゾルバは「男はキツパリと鮮やかに別れるものだ」と論じ、海辺へ向かって歩いて行った。振り返ることもなく。その後、欧州各地を移り住み作家活動を続ける『私』に、ルーマニアやセルビアなど、バルカン各地の放浪先から、時折、ゾルバの手紙が届いた。いつも、新しい女

カザンザキスは1946年、英国へ渡り、1957年ドイツ・フライブルグの病院で波乱の生涯を終え、遺体となって故郷クレタへ帰った。夫人は語った「彼は戦士のごとく、毅然として死んだ」。クレタの丘にある墓碑銘は「わたしは何も望まない／わたしは何も恐れない／わたしは自由である」。



映画『その男ゾルバ』より (C) Picture Desk/PPS

して行動の生活に飛び込むため。欧州は第一次大戦前夜の力オスの時代。祖国ギリシャも国際情勢の中で翻弄されていた。西欧的理性と知性の塊のような青年作家は、苦悶と焦燥の日々を送ってきたのだ。その青年の前に突然、背の高いギョロツとした目つきの男ゾルバが現れる。「旦那、ワシをクレタへ連れてつてくれ」。『私』は、あちこち放浪してきたに違いない老船乗りシンドバッドのような男が好きになり、道連れにすることに決めた。ゾルバはサンドウリ（民族弦楽器）の包を抱えていた。悲しみであれ、喜びであれ、感情が高まると、いつでもこれをかき鳴らすのだ。珍道中が始まった。二人のクレタの宿の主は、元パリのキャバレーの歌姫、マダム・オルタンス。彼女はあちこち渡り歩いて、クレタに腰を落着けたのだ。この世

地域と共に50年

来春完成予定の新病棟でさらなる飛躍を！
(平成27年1月竣工予定)

看護師随時募集中！

当法人は今春50周年を迎えた菅間記念病院をはじめ
在宅総合ケアセンター、那須塩原クリニック・健康増進センター
ウェルネスNASPA、那須看護専門学校の各施設で
「いつでも・どこでも・誰でも」をモットーに
関東北端の黒磯・那須地域の中核医療・健康増進を担っています。

〒325-0046 栃木県那須塩原市大黒町2-5 TEL 0287-62-0733 FAX 0287-63-9357
社会医療法人 博愛会 <http://www.hakuai.or.jp/>

寛永通宝と銭形平次

寛永通宝を有名にしたのは、何といたって『銭形平次』だろう。お金を本来の使い方ではなく、悪人と戦うための投げ銭、武器にしたところが面白い。だが、大切なお金を

どを投げてしまっても良いものかという見方もある。社会通念上、いや子どもの教育上よろしくないとも思えるからだ。こういう行為が人々に抵抗なく受け入れられたのはなぜだろう。どこか、節分の豆まきに通じるものがあるような気がする。鬼を追いかつために、豆（大切な食料）を投げつける風習だ。

大切なモノを投げる行為は、一種の厄払いの日本文化である。そういえば、賽銭箱はお金を投げ入れるものだ。お金に執着することを善しとしない江戸っ子の気風とも無関係ではないだろう。お断りしておくが、銭形平次は小説のなかの話で架空の人物。野村胡堂の『銭形平次捕物控』は、一九三〇年代（五〇年代にかけて）383編が発表され、映画化、テレビドラマ化されて親しまれた時代劇作品である。

寛永通宝（四文銭）



原寸大



寛永通宝（一文銭）

この貨幣は、三代将軍家光の時代、寛永13年（一六三六）から鑄造された。改元に影響されず、約230年間にわたり、同じ名前まで明治初頭まで造り続けられ、広く流通した。江戸の庶民が日常使ったのはこのお金である。寛永通宝は、一文銭（約25円）と、後に登場する四文銭（約100円）の2種類がある。平次親分の投げ銭は、一文銭より一回り大きい四文銭。顔に当たったとしてもちよつと痛いくらいだろう。中央に穴のある硬貨を穴明き銭あなあきせんと呼ぶ。世界の貨幣の歴史をみても珍しいものだといえる。日本最古の貨幣、富本銭ふほんせんや和銅開珎わどうかいじんも穴明き銭である。この穴は中国からの渡来銭に倣ったもので、円形でなく四角い穴としたのは理由があった。それは、溶かした金属を鑄型に流し込んでつくるという製造工程にある。出来上がったばかりの硬貨は周囲に鑄張りいばりが出てしまったために、これを削り落とす必要があり、数多くの硬貨の穴に四角い棒を通して固定し、一度にヤスリをかけ研磨した。これだと、硬貨が回転しないので都合がいい。なかなかのアイデアではないか。

直言

国連憲章は51条において、国連加盟国に対し、個別的自衛権と集団的自衛権の保持を認めている。また

先の大戦の総決算であるサンフランシスコ講和条約においても、戦勝国連合は敗戦国日本に対し、個別的自衛権と集団的自衛権を認めた。日米安全保障条約前文においても同様である。つまり、日本に9条に象徴される「無防備丸裸憲法」を押し付けたアメリカも、日本が個別・集団的自衛権を持つことを当然としたのだ。

既然如此、個別・集団的自衛権に、行使するエリア、自衛力の質や量について、事態の如何に関わらずあらかじめ制限する国際法が有るのだろうか？否である。主権国家は、まさに自衛の権利を貫徹するために必要な戦力を自らの判断で保有し、かつ行使できるのである。

従って我が国が現行憲法といえども自衛権の保持は否定されていないとしている以上、それをまっとうするに足る戦力を保有し、また行使できる法制度を整えることができると思うのは、当然の論理的帰結であろう。もし、そうでなければ、自衛権は保有しないというに等しい。

ところが我が国は、「憲法9条の精神」により、防衛上の必要性を無視する国是を持っている。いわゆる『専守防衛』がそれだ。骨子は「防衛上の必要からも、敵の国土や基地を攻撃しな

い」「相手から日本の領土に対し武力攻撃を受けた時に初めて、最小限の防衛力を行使する」「爆撃機、戦略ミサイル、空母などは持たない」というもの。

防衛上の必要があっても敵の国土や基地を攻撃せず、「座敷」に踏み込まれたときだけ抵抗するという、まさに国民防護の義務を放棄した「一億総自殺宣言」的構想なのだ。敵から見たらこんなオイシイ国はない。

そんなことで実際には国の安全は保てない。そこで、日本の安保体制の脆弱性を補うのが日米同盟ということになる。しかし、同盟でもなんでもない。日本防衛のための敵に対する打撃力は一方的にアメリカに任せる（アメリカが手を引いたら万事休す）。日本は領域内に侵入した敵とは戦えるが、公海上などでは、たとえ日本の安全のために戦っている米軍に対しても、限定的な補給支援などの後方支援しかできない、共同戦闘はもつてのほか、といったぐあいで、早い話が情けない被保護国なのである。

要するに、これまた「憲法9条の精神に鑑みて、領域外での武力行使に十分な集団的自衛権は行使できない」という憲法解釈の結果だ。同盟への信義の問題だけではなく、敵に対する対応が不十分となり、抑止力、戦闘力が著しく減殺されてしまうのである。

本来は、「憲法9条は国連憲章の理念そのものであり、侵略的戦争は禁じ

られているが、自衛のための戦力行使は何ら禁じられていない」と解釈変更し踏み切り、集団的自衛権の容認どころか専守防衛構想すら内容の変更をこころみてもおかしくない。集団的自衛権の行使容認なんぞは、ほんの序の口の話だ。

しかし、テレビの街頭インタビューで、中年主婦が集団的自衛権について反対の立場からこう答えるのには驚いた。

「私にも息子がいるのでどうも……」
徴兵制と間違えている!! こういうレベルの街のオバチャンも有権者。民主主義は大変だ。

もつと驚いたのは、自民党の高役職者である某女性衆議院議員が、街のオバチャンと全く同じセリフをテレビのマイクに向かって吐いていたことだ。中国がいつ尖閣上陸作戦を実行するか分からないときに、何を言っているのかと呆れたのだが、『新潮45』2014・6月号の青山繁晴氏の論文『オバマ、プーチン、習近平、せめぎあう「妄想」』を読んで愕然。この論文には、その某議員が中国の対日工作において、安倍政権転覆後の新総理に想定されていたというくだりがあるではないか。「某議員がそれを受け入れた事実はない」とはいうものの、中国に期待はされているのかね？ バカ者!!